

## 座談会

## こころと日本文化

日本文化においてこころはどのように捉えられてきたか。宗教学者の山折哲雄先生をお招きし、古代から現代まで、その有り様を語り合う。

山折哲雄 (国際日本文化研究センター名誉教授)

吉川左紀子 (こころの未来研究センター長)

カール・ベッカー (こころの未来研究センター教授)

鎌田東二 (こころの未来研究センター教授)

## 「心」の日本思想史

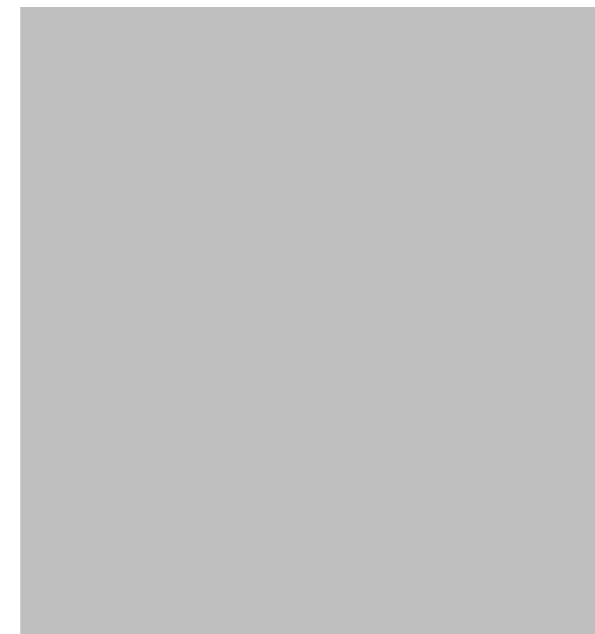
山折 日本で「心の時代」とか「心が大事である」と言われ出したのは20～30年前、1980年代前後からですね。新聞などのメディアで「心、心」と言い始めた。

少し歴史を振り返ってみると、「心」という言葉は非常に古い時代から使われていました。しかも多義的な意味で使われてきたということがわかってきて、これはやはり深い根っこがあると思うようになりました。大ざっぱに言うと、記紀、万葉の時代からすでに使われている。仏教が入ってくる前は、神道的な世界で「清き明き心」といって非常に大事にされていた。清い心、明るい心ですね。

戦前は、「清き明き心」は日本人の道德心とか倫理観の基礎を成していると説かれていました。その一種の反動で、戦後民主主義の時代はこの言葉はあまり使われないような傾向がありました。それが30年ぐらい前から意識されるようになったのは、やっぱりそれが大事なんじゃないかと再認識され、戦後民主主義の反省の上に立って「心」というタームが再登場してきたような気が私はします。

それでは、仏教が入ってきてから神道的な心の問題がどう展開をしたのかが気になって、その系統だけ調べてみました。代表的な人物を挙げると、まず最澄です。最澄の作品の中で一番重要なキーワードは「道心」です。「道心」というのは仏の道を求める心、一種の求道心です。

同時代の空海の代表的な作品に『十住心論』という著作があります。「十住心」というのは、人間の心には、動物的な段階の心から、世間的な心、倫理的な心、小乗仏教的な心、大乘仏教的な心、大乘仏教でも最高の真言密教の心ということで、十段階ある。これはまるでヘーゲルの精神現象学だなど思いましたが、そういう人間の心の内容を成熟の度合いにしたがって分類する体系的な思考はすでに空海の段階で行われていた。

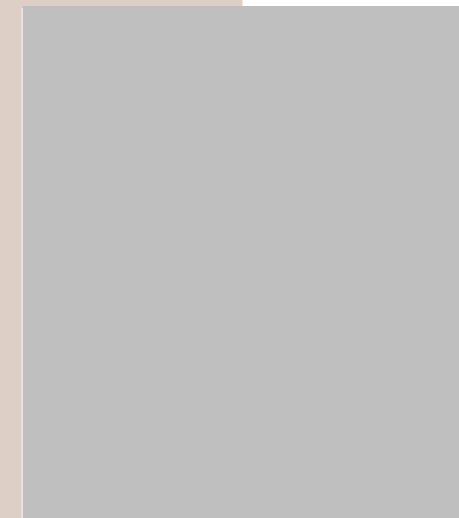


最澄 (伝教大師坐像 重要文化財 鎌倉時代 伊富貴山観音護国寺蔵) と最澄筆「天台法華宗年分縁起」(部分 国宝 平安時代 延暦寺蔵)。「天台法華宗年分縁起」には「道心」の文字が見える

空海 (弘法大師像〈談義本尊〉・部分 重要文化財 鎌倉時代 東寺蔵 写真:便利堂)



親鸞 (安城御影・部分 重要文化財 鎌倉時代 真宗大谷派蔵)



法然 (法然上人御影〈隆信〉・部分 南北朝時代 知恩院蔵)

その影響はインド仏教の段階からあるわけです。

私は、日本の仏教は、平安時代の山の仏教から初めて日本人のものになったと考えているので、外来の仏教が日本化し、日本文化の中に土着していく過程で、心が思考の対象になってきたのだと感じたんです。そのキーパーソンが、空海、最澄である。

その場合、もちろん以前の神道的な「清き明き心」を踏まえて、一種の重層化が行われている。日文研 (国際日本文化研究センター) の共同研究などをやっていく過程で、次第にそんなふうになるようになりました。

## 中世、鎌倉時代の展開

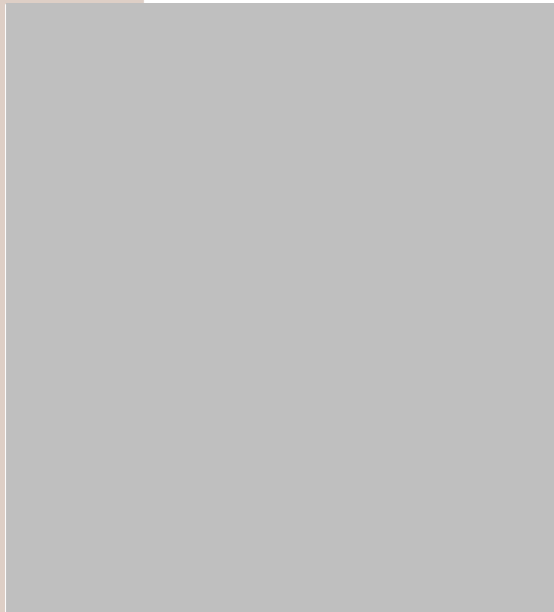
それが中世、鎌倉時代にどういうふう展開したか。法然、親鸞が「深信」ということを言います。「二種深信」という言葉がある。人間は非常に罪深い存在であるということに信ずる心が第1番目の「深信」で、もう1つは、罪深い存在だからこそ阿弥陀如来によって救済されるということで、逆転の救済の論理みたいなものが主張されている。2種類の「深信」の「信」は「信心」のことです。「信心」は日本語として非常に大事な言葉だと思います。それを信仰の論理で定義したのが法然と親鸞だったのだと思います。

ところが、それを明恵が批判するのです。法然のいう念仏の心、信心は、最澄以来の道を求める菩提心、つまり仏道を求める心とは違うと。仏道を求めるということは、激しい修行をして仏になっていくということです。これには修行が絶対に必要だという考えが前提になるのですが、法然と親鸞は、修行は重要じゃない、阿弥陀如来に対する信心こそが大事なんだと言った。「菩提心」が大事だと言う明恵に対して親鸞が反論したのが『教行信証』だと思います。この三者の論争の中で信心の問題が深められていきます。

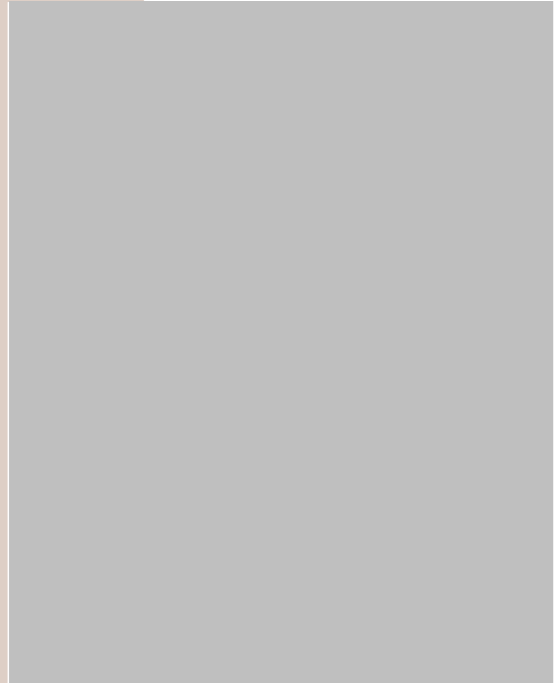
ところで、同時代の道元は「身心脱落」ということを言います。中国に行って如浄について座禅を続けているうちに、ある朝、ぱっと悟りを開く。自分の体と心が一体になり透明になっている。それは「身心脱落」である、とわかったようなわからんような言葉ですけど、そういうことを言う。

これが、その後の日本の禅の伝統のいわばキーワードになっている。ここで初めて、心と体は一体のものだという考え方が体験に基づいて論理化されていくのです。

記紀・万葉時代には、人間が死ぬと、心が体から離れて魂となって天上に昇っていくという考えがあった。だから、「清き明き心」は心身分離の考え方にもとづいていたということになります。



明恵 (明恵上人樹上坐禅像・部分 国宝 高山寺蔵)



道元 (道元禅師観月の像・部分 鎌倉時代 宝慶寺蔵)

仏教が入ってくると、そうではない、心と体は一体のものだと説く。人間の体の隅々に心が宿っていると考える。だから、日本人は臓器移植に対して非常に敏感に反応して拒否するわけです。臓器には心が宿っているものだから、部分的な器官として扱うことはできないというのが仏教的な心身一体の考え方です。だけど、古代万葉人が現代に生き返ったら、魂の行方だけが大事だったわけですから、後に残された遺体はいくらでも差し上げると言うでしょう。日本人が臓器移植に対してふっ切れない態度をとるのは、そういう心身

論に深いかかわりがある。その場面で心という問題が重層化しているわけです。体と離れるのか、体と一体のものなのか。これを非常に明快な形で主張したのが道元の「身心脱落」だと思います。

それと同じ考え方は明恵にもあります。明恵の「夢記」は河合隼雄さんが詳しく論じて夢分析をされているんですが、あの夢の中に、非常に印象的な言葉が出てきます。それは「身心凝念」という言葉です。「凝念」というのは、じっと瞑想を深めていくと心と体が一体化する。それは一種の夢幻の境地と似ていると言っている。道元の悟りの体験と明恵の悟りの体験とは限りなく近いんです。

そういうふうを考えてくると、8世紀の平安時代から中世鎌倉期に至る日本の仏教のリーダーたちは、ずっと心の探求を主要な主題にしてきたということが、私なりに見えてきました。こここのところは、従来の仏教史研究、思想史研究の中であまり問題にされなかったことではないかという気がします。

## 心を美的にとらえた世阿弥

心の探求の伝統が芸術的、美的な感覚のレベルで洗練されたのが、15世紀の世阿弥の段階だと思います。ご承知のように「初心忘るべからず」の「初心」という言葉があります。世阿弥は「初心」という言葉をいろいろな著作で使っているんで、非常に多義的です。「初心」は、実は仏教の経典の中に、月の満ち欠けとの関係で出てきていて、新月の段階が「初心」なんです。

「初心」という言葉は、確か空海も使っていたと思います。だけど、空海の場合、「初心」は「十住心」の中で比喩的に使われているだけでした。それを正面に据え、日本人の自然観、美意識、信仰心と密接不可分のものとしてとらえて、美しい言葉に移し替えた最初の方が世阿弥ではないでしょうか。15世紀は、日本人の心の問題追求において革命的な変化が起こった時代ではないかと思っています。

そこから、われわれが今日使っているさまざまな心の多義的な使い方に枝分かれしていく。その1つとして「心・技・体」なんていう言葉が近世になって出てくる。あの出発点はやはり世阿弥であるし、もちろんその前には仏教リーダーたちの探求の歴史があるわけです。「心」と「体」と「技」は一体のものだという考え方は、武道、芸道、それから普通の生活上の指針として使われるようになる。

そういう伝統があるんですが、では、その心をどういうふうにして成熟させるか、どうしたら心を純化させることができるかというのは、実は主体的な意味で

は大きな問題だったわけです。

一方では、『源氏物語』以降、人間の心は非常に汚いものだという認識が深められていきます。人間の心はいかに汚くて、埃にまみれていて、敵意、殺意に満ちているかをとことん追求したのが紫式部です。そういう伝統から、「私心」「執心」「妬心」のように、心のマイナスの面を「心」という言葉にくっつけて表現することが行われてきたのです。

悪意、敵意、嫉妬心、私心などに転落しかねない心を浄化するために、仏教徒たちは修行ということを思いついたのだらうし、それで信仰を深めようと考えた。これにたいして、あるいは、世阿弥は感動という要素をそこに持ち込む。自然との共鳴、共感の中で、次第に自分自身の利己的な関心を洗い流し、芸の力でコントロールしていく。

## 心は変化する

そういうさまざまな議論を読んでいきますと、日本人は、心は変化するものだ、あるいは、心は成熟するものだと考えていたということがわかってくる。それが、心に対する日本文化の基本的な考え方ではないかという気がします。浄化する努力を怠ると、いつでも悪しき心、禍々しい心に転落する危険性をもっている。それをわれわれは「心の闇」などと表現しています。

何の文献かは忘れたんですが、フロイドが、精神分析は50歳くらいになった人間にはあまり効果がないということを言っているんです。人間のエゴの中核に、ある変化を与えることができるのは40代か50代までだと。

インド仏教もそういう問題を考えていたのではないかと思います。エゴ、自我、自己は、徹底的にコントロールしないと、あるいは、外面的、内面的な力をそこに加えないとなかなか変化させることができない。変化させるのはものすごく困難な仕事であると。だからこそ、インド仏教では「無我」ということを言うわけです。我をとことん否定しようとする。そのために修行を積み重ね、難行苦行をやる。

ただ、日本人は、自我をそういうふう徹底的にコントロールすることなんかできない、という判断を最初からしていたのではないかと。それに代わって、心は浄化し、成熟させることはできると考えた。だから私には、「心」と「我」という二元対立の構図が背後に見えてくる。

近代になって、われわれは西洋の心理学やフロイド的な自我の考え方を受け入れて、それを日本人の精神治療に応用しようとしたんですが、我とか自己にかんし



山折 哲雄 (やまおり・てつお)

1931年生まれ。専攻は宗教史、思想史。日本を代表する宗教学者の一人。国際日本文化研究センター元所長・名誉教授、国立歴史民俗博物館名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授。著書に『人間蓮如』『日本仏教思想論序説』『日本人の靈魂観』『道元』『雲と肉』『坐』の文化論』『宗教的人間』『神と仏』『日本のころ、日本人のころ』『親鸞の浄土』『信ずる宗教、感ずる宗教』ほか多数。

てはアングロサクソン流の考え方を前提にしていた。しかし、西洋の人々の考え方と日本人とは違う。日本でフロイド心理学があまり振るわないでユング心理学が受け入れられているのは、そのへんに関係があるのではないかという気がします。

## 心をめぐる日本の戦後史

鎌田 今、山折さんから、心の日本思想史、心の比較文化論という観点から、かなり大きなスケールの話が提示されました。それについて、もう少し細かく話をしていきたいと思います。

最初に、「心」が問題になるような時代がいつ頃かといったときに、1980年代、あるいはそれ以前から起こったんだろうと言われたんですが、それについて、少し私も考えていることがあります。

60年代は肉体の時代、あるいは、暴力・ゲバルトの時代だった。例えば、唐十郎の状況劇場とか、土方巽の暗黒舞踏とか出てきて、「肉体の再発見」がテーマとなった。

ところが、70年代には、1972年の連合赤軍浅間山荘事件とかいろんなことがあって、政治の挫折があった。その後、70年代の後半に「精神世界」という言葉が広がっていった、次の展開として、密教、ヨガ、またそれ以前から関心をもたれていた禅やさまざまな瞑想や身体技法が注目されるようになり、「精神世界から心の時代へ」という大きな流れが生まれた。それまで



吉川左紀子



カール・ベッカー



鎌田東二

貧・病・争が宗教を生み出すきっかけであったけれども、「精神世界や心の時代」の特徴として、生きがい、生きる価値の探求、生活の質(QOL)といったことが考えられるようになった。それが80年代以降です。

そういう心を意識するような時代の中で、日本の文化を見直していく時に1987年に国際日本文化研究センターが設立され、また、教団の活動として新新宗教とか第三次宗教といわれるようなものが生まれて若者たちを吸収していった。それがやがて1995年のオウム真理教事件につながってゆく。

こういう心をめぐる日本の戦後史があると思うんですが、ベッカーさんは宗教学の立場から、どういう観点を持っていますか。

ベッカー お言葉を受けてお答えしますと、宗教は従来、貧しき者の拠り所で、貧・病・争に対して希望を与えるものとされてきました。しかし日本が80年代のバブル期に入ると、貧しさも争いもあまり感じず、物質的には非常に豊かになりました。その反面、いったい何を求めているのだろうか、何のために生きているのだろうか、という実存的な問いを、地位の高い知識人や僧侶のみならず、一般の日本人までも考えるようになってまいりました。

生きる意味、価値、目的は何なのか、これは目に見える問題ではなく、考えるもの・感じるものでした。武道や修行、夢や心の探求によって何か新しいもの、潜在的なものを見つけだそうとする運動が、確かに80年代あたりからさかんになったと思います。そのことと、先ほど山折先生に語っていただいた、心の浄化や修行という流れについて考えたいですね。

鎌田 そこに入る前に、同じ時代に心理学ではどんな流れがあるのか。例えば、さっきフロイドの問題が出ました。また、日本でユングが目目される背景の話が出ました。また、今や心理学ブームで、人文科学の中で一番人気がある学部・学科は、心理学部・心理学科であったりします。そういうふうに変換していく

流れの中で、心理学はどのように心を見つめてきたのでしょうか。

## 心理学が見つめてきた心

吉川 私が心理学の勉強を始めたのは1970年代ですが、「心とは何か」といったような問いについて、真剣に議論していたといった記憶はあまりないですね。京大を含めてほしい総合大学では、心理学を教える先生はいろいろな学部に分散している。それが意味で象徴的だと思うんですが、それぞれの研究者がいろいろなディシプリンで、心の働きの一部、一面に焦点をあてて研究をしている。なので、「心とは何か」とか心理学の心観のようなことについて真剣に議論し出すと、取捨がつかなくなるということなんじゃないでしょうか。

当時も今もそうですが、たとえば京大では、心理学の研究室は文学部、教育学部、教養部(現総合人間学部)に分かれていて、私が学生の頃、文学部では、動物を使った行動実験や知覚の研究が「心理学」でしたし、教育学部では、知能検査の標準化といったことが「心理学」でした。当時教育学部におられた河合隼雄先生の臨床心理学の講義が学生の間では大人気で、文学部の学生だった私もそれを聞きにいていましたが、「同じ心理学でもずいぶん違うなあ……」と。すべてに共通する「心」の概念はあるのかどうかといったことを考える以前に、なぜそれらが全部「心理学」という同じ名前でもくられるのかも、よくわからなかったような気がします。

1970～80年代は、情報処理心理学、認知心理学といったコンピュータ・サイエンスの影響を受けた心理学が非常に進んできました。人間の心の働きをコンピュータの情報処理になぞらえて理解するという形の心理学が1つの大きな流れになってきたんです。そうすると、情報処理モデルを使った実証科学的な心理学と、臨床

心理学のような、クライアントの心とどう向き合うか、といったことを考える心理学との間の溝は、ますます広がる一方、という感じでしたね。

ところが1990年代以後になって、脳科学、神経科学が心理学に非常に大きな影響を及ぼすようになってきて、それまでばらばらだった心理学の様相が少し変わってきました。動物の行動を左右するのも脳の働きですし、知覚、記憶、思考のような人の認知のプロセスも、うつや不安を抱える人の心の動きも、本を正せば脳の働きに行き着くところがあるわけです。脳科学と心理学がつながることで、人の心の科学的なとらえ方にある方向が見えてきました。それまでは、私の頭の中では、認知科学と臨床心理学は、どちらも心の学問という言い方はできるけれども、どう考えても両者を結びつける道筋がない状態でした。脳という媒介を介して心の働きについて考えることで、動物の心と人間の心のつながり、人間の心の中にある意識できる心と意識できない心の関係などが、わかりやすくなってきたと思います。

これからはさらに、仏教や神道の世界で考えられてきた「心」と、脳科学の立場から見えてくる「心」とがどう結びつけられるのか、ということ、心理学者が考えることができるようになっていくんじゃないかと思っています。

鎌田 それが、「ころの未来研究センター」ができあがる背景ですね。80年代から90年代にかけて国際日本文化研究センターが華々しく活動し展開して、初代の梅原猛さんは日本古代学を柱にし、その次に河合隼雄さんが日本人の心と文化をテーマにし、そして山折哲雄さんが3代目所長になって、日本人の信心とか、心をどう浄化あるいは鎮魂することができるかというさらに深い宗教思想や民俗事象の方向へと問題意識が推移してきたのかなと思っています。

## 心身関連の秘密

山折 私は38歳のときに胃潰瘍の再発で入院して1週間ほど絶食体験をしたんです。そのとき、3、4日ぐらいいまはものすごい飢餓感に襲われた。もちろん点滴で栄養を摂っていますが、体全体は枯れ木のようになっていった。すると、不思議なことに、5、6日目から飢餓感がすーっと引いてきたんです。そして五感が非常に鋭くなってきた。かえって生命力が賦活してきたという感じがしたんです。

私はそのとき初めて、人間の体には一種の逆説的なエネルギーと言ったらいいのか、矛盾する働きがあると思ったんです。栄養摂取をする身体という観点から

すれば、限りなく死に近づいているにもかかわらず、生きようとするエネルギーが逆に燃えさかってくる、そういうことを体験しました。

退院して、やがて東北大学の宗教学科の助教授になったんですが、そのときの体験が気になっておりましたら、医学部の心療内科の鈴木仁一先生という方と知り合った。この人は禅をやっている方なんですが、心身の疾患のある人たちに絶食療法を指導していたんです。その人が言うには、何科に行っても治らない患者が自分のところに全部来る、それに対して絶食療法をやるんだよと。

東北大学の医学部では戦前から絶食療法をやっている、特にヒステリー治療に大きな効果を発揮したという伝統があるんです。ヒステリー患者の多くの患者さんを絶食療法で治した。これは医療史の中でちゃんと記録されている治療法で、それを受け継がれていたわけです。

絶食療法をやるきっかけは人によって違う。意思堅固な人には非常に効果的なんだけれども、あまり意思の強くない人にはそれほど効かない。だけど、宗教伝統の身体技法の中には、心身関係の病気で苦しんでいる人を癒す秘密がたくさん隠されている。そういうことを前提にしていたわけです。

私は1カ月間その心療内科に通って、先生がどういう聞き取りと治療をするのか、観察をさせてもらった。私にはその時の体験が非常に大きくて、それから人間の体は心身論としてとらえることができるんだと思うようになった。1970年代あたりかな、体から心へというものの考え方の転換期だと思いますが、ものすごい数の心身関係の文献があらわれるようになった。その中でベッカーさんとも知り合うわけです。

ところが、日本の医学界において、心療内科はいつも継子扱いなんですね。だから鈴木先生は経験も豊富な人なんですが、その正規のポストは助教授どまりでした。京都大学はどうですか。

吉川 心療内科それ自体ないと思いますね。

山折 それはまた大変な問題ですね。

鎌田 日本で心療内科の概念と科をつくったのは九州大学の池見西次郎先生ですね。

山折 私もそのころいっしょの共同研究に参加したことがあります。そういうものがベースになっていて、それで医学と宗教も手を結ばなければいけないと思うようになった。

鎌田 身体と心、そして医療。その医学・医療はどういうふうに関心、変えていくことができるのか、問題を解決していくことができるのか。まさにかつて宗教はそういう技法でもあったわけだから、当然、現代の

医療や医学の問題意識と密接に結びつくはずで。

**山折** 後になって河合さんとお目にかかるようになって、それにかんするいろんなものがつながるようになりました。河合さん自身がずっと明恵の研究をやっていました。そういう点で、日文研は私にとって非常に貴重なものを考える場でした。

**ベッカー** なぜ絶食が効果をもたらすのでしょうか。

**山折** お釈迦さんは悟りを開く前の6年間、断食をやっている。聖書によるとイエス・キリストも40日間飲まず食わずで砂漠をさまよっている。イスラムにはラマダーン(断食月)がある。世界の普遍宗教のリーダーたちが宗教的真理に到達するにあたって、食を断つという経験をしていた。これは偶然なのか、そこに普遍的な意味があるのか、という人類史的な問題になってきます。

この問題はおそらく今日の拒食とか、過食、そして引きこもりの問題と深いかかわりがあるにちがいない。ただ、これをそういう宗教的な断食の伝統とどう結びつけて解決させるか、第三の道が見つけれられるかどうかですが、なかなかわかりません。

**鎌田** 私は、大学4年生の頃、1週間断食を2回したことがあるんです。水も飲まない。渋谷の大学に通いながらやったら、3日目ぐらいに心臓に激痛が走って、本当に死にかけた。そのとき、自分にとって新しい発見だったのは、体の苦しさとか渴きとかあって、体が1日1日、動けなくなっていく。渋谷まで通うのに、階段を上がるだけで心臓がぜいぜいする。人にぶつかるようによろよろする。腰に力が入らない。真っすぐ立つだけでも相当なエネルギーが必要なんです。そうすると、腰が落ちてくる。体の形、動きがまさにお年寄りの姿形になっていくんです。私は20歳ぐらいの若者であるけれども、動きそのものはまったく老人の格好なんです。そのとき、この文明社会がいかに老人、妊婦、病気の者に優しくないつくりになっているかとか、年老いていくとき体が変化することが心にどういう作用をするかといったことに気づかされました。

断食の終わりの日に近づいたころには、気みたいなのを感じ始めまして、気というのがこの世界にあって、その気を食べることができることがわかった。というのは、若い人たちが幸せそうに食べたり話をしていっているのを見てだけで、こちらのほうに気というしかなんかが注入されて、私は何も食べていないけど、元気になるんですよ。ところが、荒々しく言い争ったりしているのを見ると、自分の中のエネルギーがますます枯渇して、もう近づきたくない、見たくないという状態になる。

だから、気みたいなのは確実にこの世界に存在し

ていて、それを取り入れることができたのが仙人だ。仙人はこの世に実在する。仙人になる修行は可能だと確信したんです。そこで、仏教や神道や中国のさまざまな思想に関心を持って研究するようになりましたが、いわゆる修行者になって、修行の道で生きるところへは行かず、研究者になった。でも、自分にとっては心と体と、その次の次元、気や魂という次元に至る扉を感じたことがありました。

## 創造的病

**山折** ユング派の心理学者が言ったことでしたか、病気には2種類あるという。1つは普通の病気ですが、もう1つは「創造的な病」、クリエイティブ・イルネス(creative illness)であると。その創造的病って何だろう。病気をすることによって、一種の精神の成熟を手に入れることができる、そういう病気があるんだということのようです。器質的な病気の場合は、なかなかそうはいかないかもしれませんが、そういうもう1つの病いというのが確かにある。それを具体的に修行の場で検証してみると、そこから断食体験といったものでてくるのかなと思った。それから、私の友人で50代の働き盛りにガンになって亡くなっているのが3人いるんです。最末期になって、その3人が3人とも本当に穏やかな翁のような表情をしていたことが印象にのこっています。

いま鎌田さんが言ったように、老人に近づいていくというのは成熟のプロセスをあらわしているのかもしれない。それが表情に現れる。もちろんガンになって地獄の苦しみのなかで亡くなっていく方も多いのかもしれませんが、私の友人の場合、3人とも翁の表情をしていた。すごい葛藤の中で精神のクリエイティブな変化を経験することができたのかなとそのとき思ったのです。

**ベッカー** 苦しみの中でも、なおかつ意味を見つけることが大事だと思うのです。私が看っていた患者さんには、末期の人もいれば、治る見込みのある患者さんもいたのですが、病気を単なる邪魔、超えたい悪としか思えない人は、そこから何も学び取れずに、「なぜこういう経験をしなければいけないのか」と嘆くだけで、すごく不満がつる。それに対して、病気から学ぶ人もいる。クリエイティブ・イルネスとは限らないのですが、日本文化でも他の文化でも、病気は単なる邪魔ではなく、天から何かを学び取るべき啓示という側面を持っていると思われていました。その天からの啓示を学ぶことができれば、単に喪失や苦しみがあっただけではなく、自分の生き方について何かを学べた、と

言えるようになってくる。そうすると別の意味で納得できるのです。

**鎌田** 私が断食をやったとき、本当に死ぬかもしれないと思った。ここでやめるか続行するか決断を迫られますよね。そのときに、どんなことがあっても受け入れようみたいな、諦めというか、一線を越える瞬間みたいなのがあったと思うんです。

だから、50代でガンになって末期の状態になったとき、どこかの時点で、現実そのものを受け入れるという瞬間があったと思います。そうしたときに、楽になっていくとか、転換が起こるのかなと推測するんですけど。

**ベッカー** そもそも、何を目指して、水も飲まないで1週間断食したのですか。

**鎌田** それは悟りを求めてなんです。70年代はさまざまな活動があって、政治的なところに行く人もいれば、禅とかヨガに行く人もいました。私は演劇とかいろんなことをやっていたんですが、哲学科の学生だったということもあって、物の本質みたいなものを自力で自分の体験の中からつかみたいというのがあって、その1つが断食だったんです。

**ベッカー** 断食にはいろんな作法が必要ですね。

**鎌田** 断食は大変危険です。だから、それ以来、学生には危険なことはするものではないと、自分の身で体験して言えるようになりました。でも、あるリスクを伴いつつ、境界というのか、ここまで行ったら何かが変わる、危ないということがはっきり見えてくるということも言えます。

## 無私と無心

**山折** そのぎりぎりのところの、ある意識的な状態を、昔の人は「無私」と言ったんだろうと私は思うんです。「無私」というのは、心を限りなく無の状態に近づけることではないかと解釈したんです。それは、心を限りなく

浄化するということでもある。心にはそもそも、成熟する可能性があるから、その心をそのような方向にコントロールしようとした。日本人はこの「無私」という言葉が好きなんです。

**鎌田** 「無私」という言葉は、だれがキーワードのようにして使い始めたんですか。

**山折** 無私・無心というのは、だれがということではなくて、一種の大衆道徳としていつの間にか広まっていた。それを、近代になって意識的に使ったのが夏目漱石でしょうか。漱石の「則天去私」の「去私」は「無私」のことだと思うんです。どういうわけか漱石は「去私」という言葉を使った。ところが、漱石研究者は、ほとんどが漱石の「則天去私」という境地は理想として掲げられただけであって、漱石自身はそこまで行っていないと考えている。『門』という小説の中で言うように、自分は山門のところまでは来る。しかし、その門を潜ることはできない、その場にたたずんでいだけの寂しい男なんだ、と主人公に言わせています。

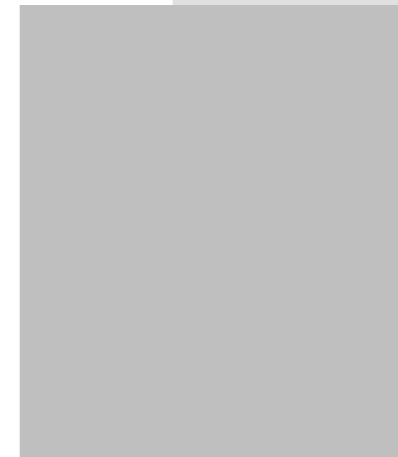
それとこの「去私」をどう結びつけるかということなんです。

江藤淳の漱石論までずっとそのような考え方で来ているような気がするんだけど、晩年の漱石の生活を子細に見ていくと、最晩年に書いているのは『道草』、そして中断したのが『明暗』です。『明暗』を書いているころの漱石は、午前中執筆しているんです。だから、午前中は小説家として近代的自我と格闘し、胃をきりきりもみ上げるような苦しみの中で書いていた。ところが午後になるとその仕事からは一切離れて、俳句を作ったり、詩を書いたり、絵を描いたりしている。芸術の世界、美の世界に遊んでいる、そしてそのときが自分の生活の中で一番自由になって解放されるときだといっている。

その気持ちがああの「則天去私」の言葉に表れていると私は思う。それは理想的な境地かもしれないけれど、最晩年の午後の時間は、実際にその境地を手にはしていたかもしれないですね。だけど、また翌日になると



夏目漱石



小林秀雄 (提供:新潮社)

書かなきゃならない。その葛藤の中であの「則天去私」という言葉が出てくる。ものすごく切実な言葉だと思います。「私」をどうして去ったらいいか。執筆者としては、去れるわけがないのです。

小林秀雄が好きな言葉は「無私」でした。『無私の精神』という本まで出している。小林秀雄における「無私」は、できるだけ私を無に近づけるときに初めて深い批評ができる。「私」がそこに混じり込んでいるうちはきちんとした批評はできないという認識からきている。一方で、自己を離れて、いったいどうして批評ができるのかという問題が出てくるわけだけれども。

小林は、例えば風呂呂に入って、刀の鏝をじっと見ていると、つまり無私の状態になっているとその本当の価値がみえてくるというわけです。こういう感覚は近代になって初めて出てきたものではない。小林は一面で近代精神の権化みたいな人なだけけれども、それはやっぱり日本文化の深い伝統の中からくみ取ってきた態度だと思う。

漱石が「去私」と言い、小林秀雄が「無私」と言う。これだけ近代的自我を追求し抜いた典型的な男たちがそういうことを言っている。この逆説をどう受け取るか。そういうことは、文学批評とか宗教研究、あるいは思想研究の中で、あまり追究されてこなかったような気がするんです。

鎌田 私は、歌は日本人の心をめぐる一番主要な表現だったと思うんです。伝統的には歌で表すことが一番多かった。『万葉集』『古今集』『新古今集』などの歌が生まれてくる中で、中世に「和歌即陀羅尼」とか「和歌即真言」という考え方ができてきた。これは、西行をはしりとして、無住、正徹、心敬といった人たちが展開していきます。

「和歌即陀羅尼」では、歌を詠むのは1首1首真言陀羅尼を唱えることにほかならないと考えます。だから、1つの仏像をつくっていくように歌をつくるんだという。まさに彫刻陀羅尼を表現した円空が出てくる時代のはしりです。心から出てくるものが真言陀羅尼として歌の中に表出されるというあの時代の精神が、日本における無私・無心の具体的な表現のはしりだったんじゃないかと思うんです。

## 善悪を呑み込む「無」

山折 人間の体のリズムと自然のリズムがぱっと合うときに詩歌が生まれる。だから、無私・無心の「無」は、自然との共鳴、共感という感覚と非常に深い結びつきがあると思うんです。漱石の場合は、そこに近づきたいと思うから、そこで絵や書が生まれる。そのときに

純粹の批評が生まれるというのが小林秀雄です。

無私・無心の「無」は非常に大きな問題だなと思うんです。これはおそらくアングロサクソンの文化の伝統にはないと思います。彼らの文化では「無」はニヒリズムに行ってしまうというところがあって……。

ベッカー ネオプラトニストのプロティヌスからトマスや中世哲学までのヴィア・ネガティヴァ (Via Negativa) という伝統もありますが。

山折 それはないとは言えないけれど、日本人の「無」に対する関心の深さは特筆すべきものがある。例えば、われわれはよく汝の宗教は何だと問われて、「無宗教」と言うんですが、これは必ずしも宗教がないということではなくて、「日本人には無の宗教がある」ということだと私は解釈しています。

「無」という言葉を聞くと、みんな心に響くものがある。一時代前には、どの家庭に行っても座敷の床の間に掛け軸がかかっている、「無」「無一物中無尽蔵」なんて書いてある。政治家や企業人のオフィスに行きますと、やっぱりお坊さんの書いた「無」とかの色紙が飾られている。

鈴木大拙は東洋の無の思想というようなことを言うし、それは西田幾多郎の「絶対無」まで行ってしまうわけです。「無」は善と悪を超えるものと言われるけれども、善悪のレベルを溶解してしまっているところがある。悪の問題を主体的に日本の思想史の中でとらえた人間は親鸞なんです。親鸞が提起した悪の問題はその後ずっと流産していった。主体的にそれをとらえる者はほとんど1人もいなかったようです。

だから、倫理的、道徳的な問題を考える場合にきわめて重要な善と悪の問題が全部無の中に解消されてしまった。踏みとどまったのは親鸞だけだったという気がします。

それが行き着くところまで行き着いたのが西田哲学です。ここは京都大学なので特に言っておきたいのですが、西田さんは『善の研究』で出発します。『善の研究』は西田哲学の最高峰の1つだと思うぐらい私は好きな作品なんです。あの中で悪の問題はほとんど論じられていない。善を論じて悪が論じられないっていったい何だろう。ずっと西田哲学を追いかけていくと、最後まで悪の研究はない。結局、善悪を飲み込む絶対無というところに行ってしまうわけです。

人間の心の内部に潜んでいるはずの善と悪の問題が、無という問題で解消されていくという長い歴史が存在していた。無を大事にするということ、これが非常に重要な考え方だとした場合、無心、無私と言い続けてきた日本人とはいったい何か。日本人の心に対する考え方って何だろうと考えると、わかったようなわ

からないような話になってくるんですね。

吉川 ある種の理想像としての無ということでしょうか。山折さんは、先ほど心の成熟とか純化ということをおっしゃっていましたが。

山折 成熟していくと、最後はやっぱり無心、無私の状態になりたいと思うようになるんでしょうね。1つの理想像でしょう。そのとき人間が大きくなる。そういう人間こそ立派な政治が行えるはずだ、というような認識にもつながっていく。

## 心の表面の部分と底の部分

吉川 喜怒哀楽の感情も、感情が揺り動かされるとき、心は動揺しますよね。それを平静な状態に保つ仕掛けのようなものが心の中であって、いろいろなつらい経験をしたときに、ゼロのポイントというか、変わらずに中間のところにとどまっている状態、ある種暖かくも冷たくもない、一番体にぴったり合ったところできっといるというのが……。

山折 まさに「平常心」ということなんでしょうね。喜怒哀楽の中間的なところでとどまる。阪神淡路大震災にしても中越地震にしても、被災者の方々の表情が非常に穏やかなんです。あれこそまさに平常心ですね。今度の中国の大地震でも、アメリカのハリケーンの時でも、インドネシア沖の大地震の場合でも、現地における被災者の方々の表情は、怒りと悲しみと苦しみとが前面に表出している。前から気になっているんですが、日本人のあの表情の穏やかさとはものすごい対称性がある。これは偶然ではない。やっぱり日本人のあの信仰、自然観と深いかわりがあるのではないかと思うんです。その自然観の最も基底に流れているのは無常感だろうと思いますね。

吉川 ある出来事に対して、感情が怒りに向かうのか悲しみに向かうのか、その境界の在処に関心があります。天災に遭遇してしまった場合も、多くの日本人の感情は怒りの方向よりも悲しみの方向に向かいますね。

ベッカー それは非常に代表的だと私も思うのですが、ただし、最近の若い日本人はかなり西洋化して、怒りが少しずつ見えてきているような気がします。

吉川 それは私も感じる場合があります。ただ、最近の若い日本人でも、伝統的なものの見方、感じ方のようなものが何かの拍子にぱっと表にでてくるのがあって、はっとさせられます。先日、センターの助教の内田さんと話をしていたときに、おもしろい話を聞きました。彼女がアメリカに留学していたとき、何人かの日本人と、巨木が生えている森を歩いたそうです。

そのとき、誰かが「こんな木を見たら、しめ縄を飾りたくなるよね」と言い、皆が本当にそうだねと共感した、というのです。アメリカの森でしめ縄を思い浮かべる、というところに、日本人だなあ、と感じます。

もうひとつの例ですが、私は北海道生まれで、仏教や神道に関わる伝統的な習慣やしきたりはほとんど知らずに育ちました。京都の通りや路地にたくさんあるお地蔵さんに、毎日水やお花が供えられているのを見て感心し、私のゼミの院生に、「京都の人は、本当にお地蔵さんを大事にしているんだね」というような話をしたら、「先生、それは違いますよ。お地蔵さんを大事にしているのではないです。お地蔵さんが私たちを見守ってくれているから、お礼に行っているんです」と言われたんです。

京都で育った学生や院生たちとしゃべっていたとき、そんなふうに言われたんですね。そのときまで、私は、若い人の中には伝統文化や宗教に対する感性は

阪神淡路大震災で無事を喜び合う高校生 (提供:毎日新聞社)



京都のあちこちにあるお地蔵さん

ずいぶん醒めていると思っていたんですが、意外にそうではないのかもしれない、と思いました。「先生、お地蔵さんをそんなふうに見たら困ります」と私はたしなめられてしまいました(笑)。

人の心は、海の底と海の表面のようなもので、表面的な部分はいろんなことで変化しているように見えるけれども、底の部分はあまり変わっていないのかなと、そのとき思いました。

## 平常心・怒り・悲しみ

**鎌田** いいお話ですね。今の話につながるかもしれないんですが、日本の神話に、アマテラス大御神とスサノオノミコトのやり取りの中で、アマテラスが天の岩戸に籠るといふ神話がある。それは、引きこもりと関係するようなことを言う人もいますけれども、それとは別に、このスサノオとアマテラスはある種のタイプというか、心理的な元型として考えることもできると思うんです。

スサノオは、ある出来事があると、それが怒りに外化され、さまざまな暴力的な振るまいをしてしまう。そういう振るまいを見たお姉さんのアマテラスは、怒りをもってそれに対するんじゃないかと、悲しんで、岩戸に籠ってしまう。なぜか悲しみが籠りになっていく。今、話を聞きながら、日本人の心の中に、悲しみがある行為や構造を形づくるような何かがあって、それが神話のこの2人のやり取りの中で表現されているのかもしれないと思ったんです。歌なども、多くは悲しみから始まります。

ちなみに、スサノオは、先ほど山折さんが言われた清き明き心があるかどうかを疑われたことから怒って

暴力を振るい、アマテラスはその暴力に対して悲しみをもって籠った。そういうことから高天原を追放されたスサノオノミコトは、ヤマタノオロチという怪物を退治して、命を助けたその土地の娘と結婚するんですが、「あが心すがすがし」、私の心はすがすがしいと言って歌を詠む。その歌が「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を」という、日本で最も古い歌になったという物語が『古事記』の中で語られています。

そこに日本人の心をめぐる表出のありようが神話的な形で表現されていると思います。それが今日まで、1つの文化装置というのか、文化元型、心理元型として底流しているんじゃないか。

ベッカー 悲しみに転じるか怒りに転じるかは、相手を人間と思うか大自然と思うかで異なってくると思います。自分に対して人間が何か悪いことをした場合、本能的に怒ってしまうのはわかりますが、地震・津波などの天災や、老・病・死などに対しては、いくら怒ったって、虚しいばかりですね。

古くから、地震や津波のような天災もありましたし、飢饉などで自分の子どもを間引きせざるを得ないような苦悩もありました。そういうときは、怒っても仕方がなかったので、悲しむ方向、自我を控える方向に働いていたと思うのです。そういう意味では、怒りに行かず悲しみに行く日本文化の方向が、西洋より成熟したものを見方のように見えます。

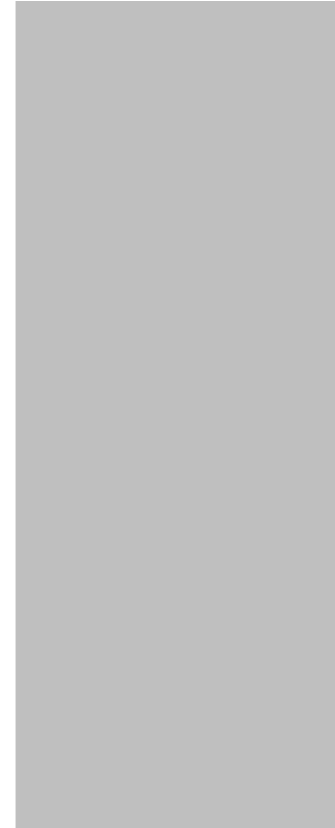
**鎌田** いろいろな要素があると思うんですが、日本人は自然界のさまざまな振る舞いを、何かの祟りだと受け止めていく志向性を保持してきた。それは、自然そのものが怒りをもって現れていると受け止めることによって、より慎ましい謙虚な生き方をするとか、畏怖や畏敬の心をもつとか、究極的には生かされて生きていることに感謝するというようになっていくんでしょう。祟りというのも、心とか日本の文化を考えていく上で非常に重要なポイントだと思います。

**吉川** それは自然からの祟りという考え方でしょうか？

**鎌田** 自然からもそうだし、生き霊、さまざまな霊、死者からの祟りもあります。まさに山折さんが研究してきたことの1つは、祟りと鎮魂の文化装置の問題ですね。

**山折** 悲しみについて言えば、『万葉集』で「恋」という言葉に「孤悲」という漢字をあてています。「孤」と「悲」しみて「恋」を表現する。恋という感情は悲しみを伴うものだという認識が万葉のころからずっとあるということです。

それは、仏教の「慈悲」という考え方と対応するわ



『万葉集』で「恋」という言葉に「孤悲」という漢字をあてた例  
(『万葉集』近衛本 京都大学附属図書館蔵)

は大きな断絶があるということです。だけど、あれはわれわれの世界観じゃないですね。死は断絶ではない。別の世界に移行していくことでもある。その移行していくときの感情の重要な役割として、悲しみをむしろポジティブに考えてきた伝統がある。だけど、キューブラー・ロスさんの5段階説では、「悲しみ」というのは「怒り」から「悲しみ」へというプロセスの中ででてくる。その違いが大きいと思います。

**鎌田** 『平家物語』の基調は「無常」と「悲」だと思うんです。社会学者の見田宗介さんが、西洋文明の一番根本には原罪意識がある、日本の文化の中には原罪意識があると書いています。「恩」を感じる。私は「原恩」に寄り添う形で「原悲」の心がある、感謝することと悲しむことが抱き合わせのようなものとしてあるんじゃないかと思うんです。

**山折** 私はミケランジェロのピエタをバチカンに行ってみました。あれはまさに悲しみの聖母なんですね。愛の聖母じゃなくて、愛と切り離された悲しみの聖母。だから、ラファエロの聖母とはまるで対極的なんです。キリスト教文明では「愛」と「悲」は二元的な存在なのだと思った。それをわれわれはいっしょのもの、切り離せないものだと認識してきた。

**鎌田** 「慈悲」という、まさにそれが融合した形で意識

で、「慈しみ」の気持ちは仏教的な「愛」だけでも、それは「悲しい」ことでもあるんだという認識です。この「悲」は人間の感情の中で、要の位置を占めていたのではないかという気がします。

そういうふうになると、例えば、キューブラー・ロスさんの死を受容するまでの5段階説がありますね。初め拒否し、やがて怒り、悲しみの段階がきて、諦めと受容とすすむ。その上で、最後にデカセクシスという

ことをいっている。死ぬことと生きることとのあいだには大きな断絶があるということです。だけど、あれはわれわれの世界観じゃないですね。死は断絶ではない。別の世界に移行していくことでもある。その移行していくときの感情の重要な役割として、悲しみをむしろポジティブに考えてきた伝統がある。だけど、キューブラー・ロスさんの5段階説では、「悲しみ」というのは「怒り」から「悲しみ」へというプロセスの中ででてくる。その違いが大きいと思います。

**鎌田** 『平家物語』の基調は「無常」と「悲」だと思うんです。社会学者の見田宗介さんが、西洋文明の一番根本には原罪意識がある、日本の文化の中には原罪意識があると書いています。「恩」を感じる。私は「原恩」に寄り添う形で「原悲」の心がある、感謝することと悲しむことが抱き合わせのようなものとしてあるんじゃないかと思うんです。

**山折** 私はミケランジェロのピエタをバチカンに行ってみました。あれはまさに悲しみの聖母なんですね。愛の聖母じゃなくて、愛と切り離された悲しみの聖母。だから、ラファエロの聖母とはまるで対極的なんです。キリスト教文明では「愛」と「悲」は二元的な存在なのだと思った。それをわれわれはいっしょのもの、切り離せないものだと認識してきた。

**鎌田** 「慈悲」という、まさにそれが融合した形で意識

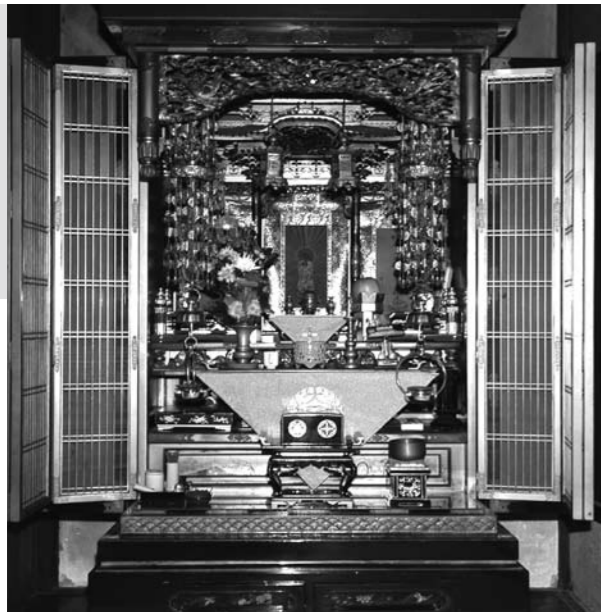
されている、あるいは心に構造化されている。

## 悲しみからの解放

**山折** 20年ぐらい前、小此木啓吾さんが日米の未亡人の比較をしたことがあるんです。自動車事故で未亡人になったアメリカのご婦人と日本のご婦人が、その悲しみ、苦しみから、どう解放され、癒されていくかということと比較した研究です。カリフォルニア大学の日系アメリカ人との共同研究だったと思います。大きな違いは、アメリカの未亡人の場合は、なかなか怒りと悲しみと苦しみから解放されない。最後までもがいている。ところが、日本の未亡人の場合は、比較的短期間に癒されている。なぜかという、日本人の場合は、だいたい仏壇の前で死者と対話を繰り返している。仏壇という癒しの装置が非常に大きな役割を果たしているのではないかというのが、そのときの仮説でした。

**ベッカー** 一昨年、ころの未来研究センターの準備段階でデニス・クラス教授に講演をしていただきました。間もなくその訳本も出版される予定ですが、彼が十数年前に小此木啓吾さんなどに基づいて、日本人は身内に死なれても、先祖や亡き夫がいっしょにいるんだという感覚があり、それが非常に癒しに重要であると指摘しました。英語でコンティニューイング・ボンズ (continuing bonds) という言葉で定着しています。そのクラス先生の理論が登場するまで、死別の悲しみは越えるべきものとされていました。フロイトの理論が主流だった精神医学では、死者を忘れられない人は病的である、という考え方が長い間支配的でした。クラス先生から出発して、亡くなった人とのつながりを持ち続けるほうがむしろ健全であるという研究がかなり多くなってきているし、多くの西洋人もそれに賛同しています。

ただし、残念ながら、最近の日本人でも、アメリカ人と同様に、怒りや悲嘆に暮れて、いつまでも癒されない傾向にあります。調べてみると、やはり仏壇などで対話しなくなっているのです。仏壇を通して対話することが非常に健全な行為であることが最近欧米でも認められているのに、日本人は、その慣習から遠ざかるようとする傾向にあるのは、まことに皮肉なことです。**山折** 核家族化して、マンションやアパートに住む人が増え、空間的にも仏壇を置くところがない。ところが、最近では小型の仏壇、小型の位牌がデザインを工夫して売られていて、若い人に比較的使われているようです。そういうものを置いている若者たちが、どういう心の変化を経験しているか。それはやっぱり



仏壇は死者と対話する癒しの装置

調査する必要があるでしょうね。

私はこの前、若者たちのための商品ばかり集めている店に行って驚いたんですが、文房具からペットやぬいぐるみみたいなもので何から何まで全部ある。けっこう若者たちもああいうものを飾って、自分の平常心を保とうとしているのかもしれないね。

## オリンピック選手の意識の変化

**鎌田** 日本人の意識がどれくらい変わったのか、あるいは変わっていないのかを、いろんな方法論で探る必要があると思います。例えば、オリンピックでも、勝者に対して共感が寄せられるというのが1つの型ですね。しかし、日本人にとっては、敗者に対する共感も非常に重要な要素だと思います。判官びいきのような、敗れ去っていく者、あるいは悲しみをもって去っていく者に対して深い思いやりや共感を寄せるという文化構造は、とても重要な心のありようではないか。

**ベッカー** 私がティーンエイジのころ日本の文化に関心を抱いたきっかけの1つは、日本人がオリンピックなどで敗者となった場合に、コーチや家族、国民に対して「申し訳ない。これだけ助けていただいたのに勝てなかったのはすまなかった」というお詫びの仕方がすごく美的で、納得できたからです。

それに対して、アメリカ人は「ちょっと努力が足りなかった。今回はうまくいかなかったが、次回がんばります」というだけで、まわりの人に対する配慮はなかったのです。日本人は負けても強いつながりをもってお詫びできるのがすばらしいと感じたの

に、最近は日本の選手たちも、負けても「今日は調子が悪かったけど、またがんばります」と言うだけで、そのつながりを気持ちで示せなくなっていることが悔しいです。

**鎌田** 柔道の井上康生選手なんかは「悲」があったように思います。だから、今はそういう人物もいれば、そうでない人も出てきているということでしょうね。

**山折** 一昨年2月にイタリアのトリノで冬季オリンピックがありました。あのとき、日本の選手は連戦連敗で、一番最後に荒川静香さんがフィギュアで金メダルを取った。日本人選手のメダルはあれだけでした。

オリンピックが中盤に入ったころでした。だめだなと思ってNHKのテレビを見ていたら、画面に前畑秀子さんの表情が出た。生前の前畑秀子のオリンピックの栄光の時代を回想する番組を再放送していたんです。その中で前畑秀子は何を言っていたかという、彼女は1932年にロサンゼルス・オリンピックに出て女子平泳ぎ200mで銀を取ります。日本に帰ってきて、もう引退しようと思っていたところ、次はベルリンで金を取れという世論が巻き起こってきた。困ってお母さんに相談したら、お母さんが、「がんばってやりなさい。国民の皆さんにそう言われているんだから」と言う。その母の言葉を支えにして4年間練習をして、ベルリンの大会に出て、決勝レースまで進んでいった。飛び込み台に上るとき、心の中で「死ぬ覚悟で泳ごう」と言い聞かせた。そして、飛び込み台に上って、ピストルが鳴る直前、「神様!」と心に叫んだ——それを淡々と語っていたんです。「母」「死ぬ覚悟」「神様」。これは3つのキーワードだなと思いました。その映像は、負け続けているトリノの現地の選手たちに対する励ましのつもりで流していた。NHKも時にはいいことをやるなと思って見ていたんです。

その3つのキーワードは、前畑秀子だけでなく、当時の若者たちはみんなもっていたもので、国民も共有できた考え方だったのだなとあらためて思いました。それでは、現在のオリンピック、トリノにいった選手たちはどういうキーワードを心の支えにして出場しているのだろうか、ちょっと調べてみたんです。その結果、3つのキーワードが出てきました。それは、先ほどベッカーさんが言われたことと重なるんだけど、1つは、「自分らしくプレーする」。それはほとんどの選手が言っている。2番目が「楽しくプレーする」。3番目が「笑顔浮かべてプレーしたい」。これが現代の若者たちがオリンピックに出るときの3つのキーワードです。

先ほどの前畑秀子が自らに言い聞かせた3つのキーワードとものごく対照的です。70年間にどれだけ

価値観の変化が起こったのだろうか、私は愕然としました。これは負けるはずだと思ったんだけど、しばらくして反省しました。でも、荒川静香さんは金を取ったじゃないかと。それで、はっと思ったんです。荒川選手にじっくり話を聞いたら、彼女は練習の過程で「お母さん!」と叫んでいたのかもしれない。「死ぬ覚悟でがんばらなきゃいけない」と思っていたかもしれない。そして、「神さま、仏さま」と叫んだかもしれない。それは、メディアや日本の大人社会が、子どもたちの心の底に耳を近づけて深く聞こうとしていないということではないか。これはやっぱりわれわれの問題だ、日本の現代の社会の問題だと思ったんです。

そういう経験を私は何度かしたことがあるんです。今の子どもたちともじっくり話し合くと、茶髪の人間でも、思わぬことを言うことがある。それはわれわれの価値観とそれほど隔たっていない。先ほどの吉川さんの話もそうですね。だから、メディアや大人の常識にごまかされてはいけない。

**鎌田** メディアと、あと、例えば、教室なら教室の人間関係の中で、ちょっと変わったことを言って突出すると自分はどうなるかみたいなことに対する過剰な防衛とか配慮が、生な自分の心の底にある言葉を出しにくい状況にしているのも事実だと思うんです。それを一皮むいていくと、それこそ河合隼雄先生の相談の中に出てくるような心の状況が出てくるんだと思います。そこで出てくるのは、さっき山折さんが言われたような言葉かもしれないですね。それは、隠されている、閉ざされているということかもしれない。

**山折** 去年の夏、世界陸上の大阪大会があった。あのとき、私が一番関心を持ったのが100mの決勝です。下馬評では、アメリカからやって来たタイソン・ゲイト、ジャマイカ出身のアサファ・パウエル、この2人の争いになるだろうと言われていたんですが、実際にそうなった。結局、その決勝レースで優勝したのはタイソン・ゲイトだった。終わった後、記者会見で彼が質問に答えている言葉に私ははっとしたんです。

スタートを切った時点で、ライバルのパウエルに遅れをとっていた。70mぐらいの時には肩ひとつぐらい抜かれていた。そのとき、母親の言葉が甦ったという

んです。その言葉が、「おまえのやっていることは価値がある。意味がある」。この2つの言葉が甦り、全身に力がみなぎって加速がついた。そして、70mぐらいのときに追い越した。数秒の間にそこまで分析できるかなと思うんだけど、そういう談話を残して、それが新聞の隅にちょこっと書いてあった。

私はこれにはびっくりしました。もっと大きな記事として書くべきだと思った。だって、この日本の男女共同参画社会においては、母の力とか、母の言葉なんていうことはほとんど言われなくなった。それがアメリカの黒人選手が、母の言葉で勝つことができたと言ったのですよ。

**鎌田** オリンピック選手といえば、アテネ・オリンピックのときに女子マラソンで優勝した野口みずき選手が優勝インタビューで語った「走った距離は裏切らない」という言葉がとても印象的でした。文字どおり解釈すると、努力したものは報われる。決して裏切られることはない、ということになるんですけど、私はそういう表層的な意味じゃなくて、昔の言い方をすれば、「お天道様は見ている」みたいな、もくもくと努力したことを見守るものがあって勝利できたというふうな、謙虚な心を感じたのです。

**山折** 増田明美さんと対談したとき聞いたんですが、マラソンは42.195キロでしょう。これを自分たちは「死に行く」と読んでいます。あっと思ったんです。それは彼らの業界用語で、表にはほとんど出ません。日本の社会は相当いろんな価値観を隠蔽してきているのではないか。

## 「死ぬ覚悟」をめぐって

**ベッカー** 山折先生は、死について何冊もの本を書いていらっしゃるんですが、死に対する関心はどういうところから生まれてきているのでしょうか。

**山折** 9.11のテロがあって半年ぐらい経ったとき、文

アメリカ同時多発テロ  
航空機2機が激突し、炎上する  
世界貿易センタービル  
(提供:AFP=時事)

なのか、いったいなぜこれが起こっているのか、ということをもっと知ることが大切ではないですか」と申し上げたんですが、どの新聞も、そのコメントは載せませんでした。いきなり、どう軍事的にやり返すかというところに転じてしまって。

それも、さっきの怒りと悲しみと関連していると思います。人生が思うようにいかないとき、苦しいと思うときに、だれかを殴ろうとするのか、それとも、いったい自分のどこが悪いのかと考えて煩惱執着を断ち切ろうとするのかでは大きな違いです。

## 「ころの未来研究センター」への期待

**鎌田** 最後に、山折さんに「ころの未来研究センター」に期待することを一言お願いします。

**山折** 今、若者世代と、私ら中高年世代との間に、特に心に対するジェネレーション・ギャップがあるように見えるんですが、本当にそうかなと思うことがあります。もっと両方に共通する心のあり方が、いろんな場面であるような気がします。それを再発見していくことが、これからの日本の未来に希望をもたらししてくれるのではないかなとね。そういう面でのご研究をしていただくとうれしいと思います。

**鎌田** そういう日本人の老若男女に共通する心のありようが、はたして現在どのようにあるのか。また、先ほどの、「無私」とか「母」とか「死ぬ覚悟」とか、そういうキーワードになるような言葉が持つ意味、価値、シンボリズムというものも含めて、いろいろと「ころの未来研究センター」では研究していく課題と役割があると思っています。

今日は本当にありがとうございました。

(2008年5月19日 京都大学にて)

水没した観光バス  
2004年10月21日、台風23号の大雨で舞鶴市を流れる由良川の水があふれ観光バスが水没した。写真はバスの屋根に避難して救助を待つ乗客ら(提供:第8管区海上保安本部)

**吉川** 言霊のようなものを信じるかどうかは別にしても、私たちは死や病に関わることは直接は言わないで済みます、といったことがある気がしますね。言霊は鎌田さんの研究の中にもありますけれども、それを口にするによって、言ったことが現実化してくるというような気持ちがあるのかもしれない。

私自身はあまりそういう考え方をしない人間だと思っていたんですけども、センターのプロジェクトとして、ベッカーさんが癌患者の介護の研究をされています。私は両親を癌で亡くしているものですから、プロジェクトの一覧表をぱっと見ると「癌患者」という言葉が目飛び込んでくるように見えました。それはちょっときつい、と。もう少し一般的な、病気の介護というような言葉に替えてもらえないかという話をすることがあります。癌患者の方々についての研究をされているわけですから、それが正しい表現なんだけれども、私はあまり使ってほしくないな、と。

「死ぬ覚悟」というようなことばは、最近では滅多に聞きませんが、内心にはあっても表には出さないほうがいいというタブーのような感覚があるのかもしれない。

**ベッカー** 9.11の直後に、日本のいくつかの新聞から私のところに電話がかかってきて、「テロをどう思いますか」とコメントを求められました。もちろん、決してテロを肯定するつもりはないと断った上で、「もしもあなたが道を歩いていて、だれかにいきなり殴られた場合、考えずに殴り返すのか、それとも相手の心を探ろうとするのか、どっちなのか」と聞いたんです。

「確かに、とんでもない悲劇が今ニューヨークで起きているようですが、まず相手はだれなのか、そして、その裏の心が何なのかということを知らないでは答えようがないのではないかな。いきなり殴られた場合、私があなたに何か悪いことをしたのか、あるいは人違い

を見せているようです。日本は先進国に類を見ないほどの医療費を使って、異常な延命装置や医療機械を末期患者につけています。客観的な調査をさせてもらうと、患者自身はそれを望んでいない。チューブ漬けになりたいという日本人は皆無に等しいんです。ところが、これでもか、これでもか、というチューブ漬けを頼むのが、患者自身ではなくて周囲の人々です。それは彼らが死を覚悟できていないからではないかと思うんです。

戦前までは日本人が世界で一番死を怖がらない民族だったという調査があります。ところが、戦争が終わって5年も経たないうちに、日本人が一番死を怖がる民族の1つに転じている。死がタブーになったのは、あまりにもむごい死がたくさんあったから、終戦直後からしばらくの間、もう死を語らないでいこうという空気が生まれたのはよくわかるのですが、その結果の1つとして、語られないものは怖いんですね。

**山折** 4～5年前、台風で舞鶴の由良川が決壊し、大洪水になりました。観光バスが洪水の中に閉じ込められて、37人の中高年の方々が全員救出されるということがありましたね。

その後、NHKが、あそこにおられた2～3人の女性の方をスタジオに呼んで番組をつくりました。実際はどういう状況だったのか。元看護師さんだった方とか、そういう方面の仕事をした人が中心になって、励ましたり、肩を組んだり、歌を歌ったり、心臓マッサージをしたり、そうして全員救出されたんです、と体験談を話しておられた。

そのとき、あるご婦人がこういうことを言われた。「私たちは全員助かるつもりで一生涯懸命やりました。1人でも犠牲者が出れば全員死ぬ覚悟で、生き残ろうという努力をして生きて帰ることができました」。「死ぬ覚悟」という言葉が出てきたんです。私はそのときはと思った。その言葉はごく自然に出てきていた。

ところが、番組の最後に、NHKの司会者と防災関係の専門家お二人が出てきて総括した。「全員生き抜こう、助かろうと思ってこの危機を乗り越えることができたんですね」と、これで番組が終わったんですね。そこでは「死ぬ覚悟」の言葉が消されていた。

まとめとしてはそれしかないなと思うけれども、しかし、あの番組のキーワードはまさに「死ぬ覚悟」だったと思うんです。「1人でも犠牲者が出るなら全員死ぬ覚悟で」という言葉の重さが非常に印象深かったんですが、それがやっぱりマスコミ的な正義というかな、メディアの総括の仕方としては具合が悪いという判断でしょう。専門家もそれに同意していたわけですから。

化庁長官だった河合隼雄さんから声をかけられて、京都で何人かの人といっしょに当時の首相の小泉純一郎さんと食事をしたことがあります。

そのとき、私は質問しようかしまいかと思っていたことが1つあった。それは、そういう場だから迷ったんですけれども、「言ってしまう」と思って言いました。9.11のときにブッシュ大統領が世界に向かって演説しましたよね。一番最後は、旧約聖書のダビデの言葉、「われわれは今死の谷を歩んでいる。神の加護のもとに進んでいこう」で締めくくっているんです。それを持ち出して、「ブッシュはそういう言葉でメッセージを結びましたが、もし首相官邸であのようなテロが発生したとき、首相はどのような言葉で、世界に向けて、日本人に向けて、メッセージを発しようとなさいますか」と言ったんです。そうしたら、小泉さんはしばらく天井の方を向いていましたが、一言、「ないな」と。

それは、私自身、あるいは日本人自身にその問いを向けたときにも、やっぱりすっとは出てこないだろうなと思っていたんです。旧約聖書の言葉に匹敵するような強い言葉が、われわれの文化伝統の中にあるだろうかと思いつながっていたので、自分の問題でもあったわけです。しかし、首相は「ない」とおっしゃった。私はその場では何も言わなかったんだけど、腹の中では1つだけあるかもしれないと思っていた。それは「死ぬ覚悟」という言葉です。日本の文化の中では、そういう危機的な状況のとき、「死ぬ覚悟」とか「死」が非常に大きな意味を持っていた。武道、芸道、政治の世界など、歴史を探っていくと、それにかかわる強い言葉はいくつも存在していた。それが一瞬、小泉さんの口から出てくるかなと思ったんだけど、「ない」と言われた。

ところが、この間の衆議院選挙で自民党が大勝しました。あのときは「小泉選挙」と言われましたが、小泉さんは選挙運動の真っ最中、「自分はこの選挙を死ぬ覚悟でやっています」と言っていた。ああ、小泉首相から「死ぬ覚悟」という言葉が出てきたと思った。

「死ぬ覚悟」というのは、今はタブー視されている言葉ですよね。でも、やっぱり本音はそこだったんだと。そういうことは、前畑秀子の時代から小泉純一郎までずっとつながっているんだと思った。結局それしかないと思うんです。しかし、戦前の軍国主義の体験から、今は「死ぬ覚悟」って使っちゃいけない言葉になっているような気がします。だから、これも言葉の隠蔽ということの典型例ですね。

**ベッカー** 敵に殺される「死ぬ覚悟」の必要はなくてよくても、人間は全員必ず死んでゆきますね。ところが最近、医師も家族も、生に対して異常なほどの執着